

# ブラームス: 交響曲第1番

H. S.

2017.05.07-

# 目次

はじめに	3
第1章 作曲に関する経緯	4
1.1 背景	4
1.2 作曲過程	4
1.3 初演	4
1.4 出版	4
第2章 作品の構造	6
2.1 概観	6
2.2 第1楽章: <i>Un poco sostenuto-Allegro</i>	6
2.3 第2楽章	6
2.4 第3楽章: <i>Un poco Allegretto e grazioso</i>	6
2.5 第4楽章	9
第3章 演奏と録音	10
3.1 初演から出版まで	10
3.2 19世紀ドイツ・オーストリアにおける受容	10
3.3 ヨーロッパおよびアメリカ	10
3.4 日本における演奏史	10
3.5 録音	10
参考文献	11

はじめに

## 第1章

# 作曲に関する経緯

### 1.1 背景

### 1.2 作曲過程

### 1.3 初演

### 1.4 出版

完成版の楽譜がブラームスからジムロックに発送されたのは1877年5月31日(2楽章を除く)で、1877年10月に管弦楽版総譜、パート譜、ピアノ連弾版が同時に出版されている。出版報酬は5000ターラーであった。出版の遅れは同じ時期に交響曲第2番の作曲が進められていたことが影響していると考えられる。

出版用のスコア自筆譜は1楽章のみ1900年代初頭に失われているが、2, 3, 4楽章はピーアポイント・モーガン図書館に収蔵されている。4楽章の終わりに”J. Brahms Lichtenthal Sept: 76”と書き込まれている(図1)が、当然その第2楽章はそれ以後に作成されたものである。ピアノ連弾版自筆譜はアメリカ議会図書館に収蔵されていて、”Pörschach Juni 77. J. Br.”と署名されている。

現在普及している楽譜は、他の交響曲もそうだが、1920年代のBreitkopf & Härtel社によるブラームス全集を底本としている。この全集版にはEusebius Mandyczewskiも加わっているが、特に器楽曲に関してはHans Gálが編集主幹として作業に当たっている。Dover版、あるいは国内版である音楽之友社版、全音版はいずれもこの流れに位置づけられる。

ただ、このBH全集版は自筆譜ではなく、ウィーン楽友協会に保管されている作曲者の書き込み付き初版譜をもとにしている。この書き込みには一時的な試し書きも含まれており、どれだけブラームスの最終的な決定を反映しているかが微妙な問題である。この点に注意を払ったRobert Pascall校訂による新版がHenle社から1997年に出版されている。ただしこの曲に関してはHenle版とBH全集版とでさほど重大な相違は見られない。むしろこの新版には破棄を免れたカールスルーエ初演時の1st, 2nd ヴァイオリンとヴィオラのパート譜が付録として掲載されていることが興味深い。

なお、IMSLPから、管弦楽版自筆譜(1楽章を除く)、ピアノ連弾版自筆譜、ジムロックの管弦楽版初版譜、BH全集版初版譜、BH全集版パート譜などがダウンロードできる。

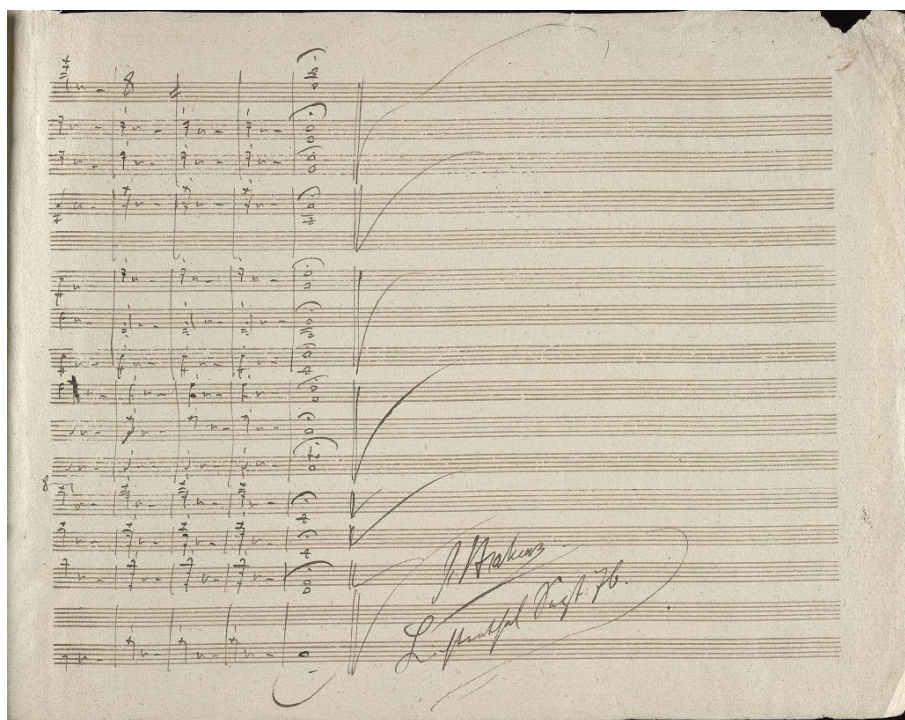


図1 自筆譜の最終ページ

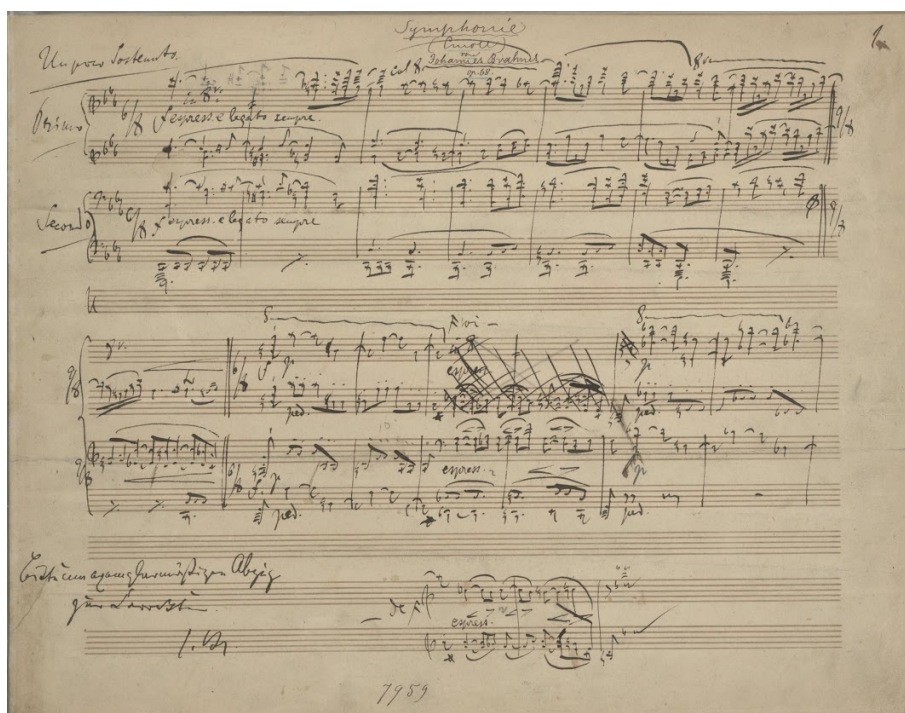


図2 ピアノ連弾版自筆譜の冒頭ページ

## 第2章

# 作品の構造

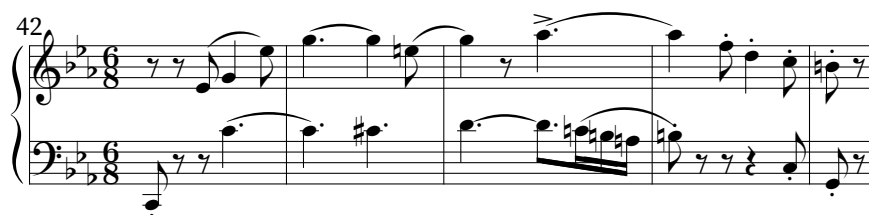
### 2.1 概観

### 2.2 第1楽章: Un poco sostenuto–Allegro

この楽章は大規模な序奏を持つソナタ形式で、全体の構成を表1に示す(便宜上展開部を  $D_1$ ,  $D_2$ ,  $D_3$  に分けた)。この表では再現部の入りを第343小節としたが、この点については後の詳細な議論を見よ。

序奏 I	提示部 E			展開部 D			再現部 R			コーダ C
1–37	38–188			189–342			343–462			463–511
	$E_1$	$E_2$	$E_c$	$D_1$	$D_2$	$D_3$	$R_1$	$R_2$	$R_c$	
	38–	130–	159–	189–	225–	293–	343–	403–	430–	
c	c	Es	es	H–h–c	Ges–c	c–fis	c	C	c	f–C

表1 第1楽章の構成



譜例1: 第1楽章第42小節から

### 2.3 第2楽章

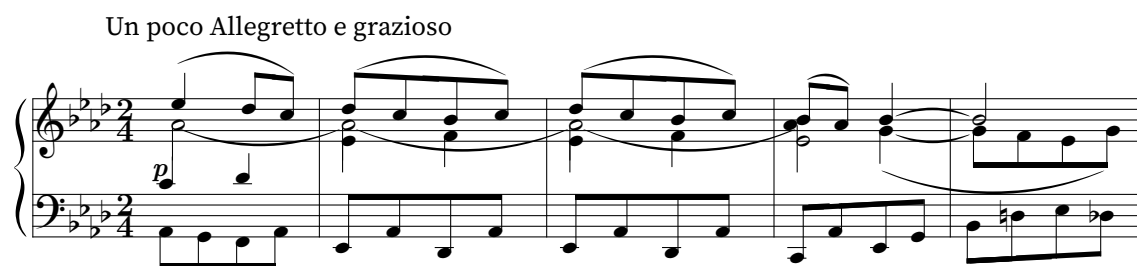
### 2.4 第3楽章: Un poco Allegretto e grazioso

ブラームスはこの大規模な交響曲の中で、164小節という小振りな「間奏曲」を用意した。ベートーヴェン風のスケルツォではなく、より古風なメヌエットのような音楽をここに置いたことは、ベートーヴェンの交響曲(例えば第5番)から意識的に距離を置いていることの現れであろう。しかも、この楽章は全体を通して二拍子で書かれており、純然たるメヌエットでさえない。この楽章は完全にブラームス風の音楽であり、この事実ひとつ取ってもブラームスの第1番が「ベートーヴェンの第10番」という評価では言い尽くせないことがよく表れている。

主部 (A)	中間部 (B)	再現部 (A')	コーダ
1-70	71-114	115-153	154-164
As-Dur, 2/4	H-Dur, 6/8	As-Dur, 2/4	As-Dur, 2/4 (6/8)

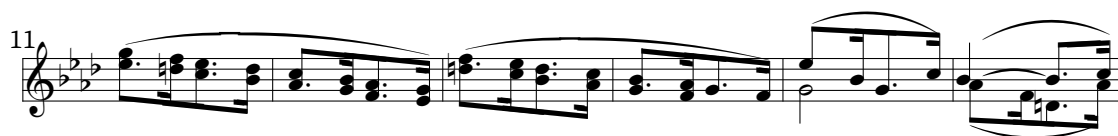
表2 第3楽章の構成

構成は比較的単純な三部形式 (A-B-A') だが、後で見るように再現部 A' は主部 A の単調な繰り返しとなることが避けられており、三部形式の短い楽章にしては変化に富んだ印象を与える。



譜例 2: 第3楽章冒頭

第3楽章冒頭はまずチェロのピッチカートに乗ってクラリネットが優雅な旋律を提示する (譜例 2)。ブラームスらしく5小節を単位とする変則的な構造を取る。しかも、2拍子が5小節続くのではなく、2+2+3+3という変拍子である。第6小節からはその反行形が続く。フルートとファゴットが加わる第11小節からは下降音型を中心とする第2句である (譜例 3)。こちらは冒頭のクラリネット (第1句) と異なり 4+4 小節の標準的な形である。第1句と第2句がこの楽章の基本主題を構成する。



譜例 3: 第3楽章第11小節から

第19小節から、やや拡大された形で両旋律が確保される。ここで依然として第1句は9小節単位という変則的な形を、第2句は4小節単位の標準的な形を保っていることは注目し値する。また、拡大部分である第29小節から第31小節にかけて、Vn2にこの曲の基本動機 x がさりげなく登場している (譜例 4) ことにも注意したい。



譜例 4: 第3楽章第29小節2拍目からの Vn2

第45小節でヘ短調に落ち込むと、クラリネット、次いでフルートとオーボエに新しいリズムが出る (譜例 5) が、これは前半は第2句、後半は第1句に基づく経過句である。







第126小節からの第2句は後半が大幅に拡大され、主部にあったヘ短調の経過句を飲み込んで、第144小節での第1句の再提示へと繋がる。ヴァイオリンが一瞬だけ基本主題xを思い出す(第148小節)が、しかしその思いを振り切って変ニ短調に傾斜したコーダへ入る。

コーダは第154小節から第164小節というごく短いもので、中間部Bの追憶となっている。ここではブラームスが好んで使用した二連符と三連符の交錯がくすんだニュアンスという絶妙な効果を発揮している。また、下降音型は短調と、上昇音型は長調と結び付けられており、主和音の明確な提示を回避しながらも十分な音楽的效果が発揮される。この手法は後の交響曲第3番、特に第4楽章第2主題を思わせる。

第3楽章は、大規模な第1楽章、第4楽章の間にあって規模が小さすぎ、音楽的にも内容に乏しいとの批判がある。しかしこの批判は妥当ではない。上で見たように、さりげない形で<sup>\*1</sup>第1楽章の内容を再提示し、フィナーレへの足掛かりを用意するという点にこの楽章の意義がある。この観点からするとブラームスが書き下したこの音楽は必要な内容を完全に含んでおり、作品全体を傑作たらしめるのに十分であると言えよう。

## 2.5 第4楽章

---

<sup>\*1</sup> この点でもベートーヴェンの第5番あるいは第9番との相違は際立っている。

## 第3章

# 演奏と録音

3.1 初演から出版まで

3.2 19世紀ドイツ・オーストリアにおける受容

3.3 ヨーロッパおよびアメリカ

3.4 日本における演奏史

3.5 録音

## 参考文献

- [1] ウォルター・フリッシュ (訳：天崎 浩二) 「ブラームス 4 つの交響曲」 音楽之友社 (1999)
- [2] 三宅 幸夫 「ブラームス」 新潮文庫 (1986)
- [3] 池辺 晋一郎 「ブラームスの音符たち」 音楽之友社 (2005)
- [4] 西原 稔 「作曲家 人と作品シリーズ ブラームス」 音楽之友社 (2006)
- [5] 「作曲家別名曲解説ライブラリー ブラームス」 音楽之友社 (1993)
- [6] 「ブラームス回想録集」 全三巻, 音楽之友社 (2004)
- [7] スコア 音楽之友社版 (2003) 解説：三宅 幸夫
- [8] スコア G. Henle Verlag 版 (1997) 解説：Robert Pascall
- [9] ベルホルト・リッツマン編 (編訳：原田 光子) 「クララ・シューマン ヨハネス・ブラームス 友情の書簡」 みすず書房 (2012)